

アイノスは歴史的なのか
——亀井大輔『デリダ 歴史の思考』について——

L'αἰὼς est-il historique ? : sur *Derrida : une pensée de l'histoire*

松田 智裕*

はじめに

ある哲学者を論じた研究書を評価するとき、新資料への言及はその研究の「成果」を判断するための指標だと考えられている。とりわけ、デリダのように未刊草稿がまだまだ膨大にあり、先行研究が1960年代の前期著作や1980年代後半以降の後期著作に偏っているような哲学者を研究するうえでは、草稿調査や新資料への目配せは不可欠なものとなる。

しかし、新しい素材を扱うことがつねに新しい解釈や観点を生み出すことにつながるとは限らない。その思想の射程を問い直すことをせず新資料に言及して満足するなら、結果として従来の見解をただ繰り返すことに終わりがかねない。それを避けるためには、新資料に光をあてるだけでなく、何度も読まれてきたテキストを改めて取りあげ直し、その哲学者が向かおうとした問いの中心に一步一步近づこうとする地道な努力が要求される。新資料や未刊草稿にも目を配りつつ、しばしば「論じ尽くされた」との烙印を押される1960年代のデリダの前期著作を改めて読み解くことで彼の思想形成を問うた、亀井大輔による『デリダ 歴史の思考』は、このような努力に支えられた本格的な発展史研究である。

本論文の目的は、本書のデリダ解釈を紹介しつつ、その特徴や意義、問題

* 立命館大学文学部初任研究員

含みな点を検討することにある。そのために、(1) 本書の特徴、(2) 本書の内容と意義、(3) 本書の問題点という順番で議論を進めることにする。

1. 本書の特徴

冒頭で述べられているように、本書が試みるのは「デリダの思想をひとつの〈歴史の思考〉として提示すること」¹⁾である。ここで、本書を貫くテーマとして「歴史 (histoire)」という主題が登場するが、その内容を検討する前に、まずは本書の特徴を確認しておきたい。

著者も述べているように、「歴史」という主題を軸にデリダの思想形成を明らかにしようとする試みはそれほど新しいものではない²⁾。周知のとおり、デリダはフッサール現象学の研究者として出発した哲学者であり、1950年代から1960年代前半にかけて、多くのフッサール論を残している。『フッサール哲学における発生の問題』(執筆は1953-1954年、出版は1990年、以下『発生の問題』)や『幾何学の起源・序説』(1962年、以下『序説』)は、この時期の代表的な著作であり、そこでは「差延」や「脱構築」といった用語自体はまだ現れていないものの、その母型となる議論がすでになされている。そのため、元々はフッサールの研究者だったデリダがどのようにして「脱構築」の思想家へと変貌したのかを考察しようとする試みはこれまでも多くなされており、そのなかには「歴史」の問題に焦点をあてたものもあった³⁾。したがって、「歴史」という主題を軸にデリダの思想展開を紐解くという試みは、それなりに蓄積のあるテーマではある。ただし、依拠するテキストや扱う論点に関して従来の研究と本書のあいだには大きな違いがあり、それが本書の記述に独特のアクセントを与えている。この違いを著者が明確に語っているわけではないが、それを概ね次のようにまとめることができるだろう。

一つ目の違いは、先行研究では初期フッサール論を中心にデリダの歴史論

の形成が取りあげられていたのに対し、本書はそれを1964-1965年度の講義『ハイデガー——存在の問いと歴史』（刊行は2013年、以下『ハイデガー』）に依拠して論じている点である。従来の研究においてデリダの歴史論の展開は、後期フッサールにおける「歴史の目的論」や「超越論的歴史」に対する彼の解釈を中心に、デリダがフッサールの目的論的な歴史観をどう乗り越え、それが後の「差延」や「痕跡」といった概念へとどうつながるのかという視点から描かれる傾向にあった。しかし、1963年以降のデリダは、ニーチェ、フロイト、ハイデガー、レヴィナスなど様々な文脈で「歴史」を問題にするようになり、そのため初期フッサール論と1963年以降の各論文とがどうつながるのか、不透明な点も多かった。これに対して本書は、2013年に刊行された『ハイデガー』講義を、両者をつなぐ「ミッシング・リンク」⁴⁾とみなしている。この講義のなかでデリダは、「存在論的解体」と「歴史」の問題を軸にハイデガーの思想変遷を考察しているが、その過程で彼はフッサールの「歴史」概念とハイデガーのそれとを対比し、さらにはフロイトの「マジック・メモ」やレヴィナスの「痕跡」など、後年のデリダが取り組むことになる主題にいち早く言及している。なにより、「脱構築」という言葉が登場するのもこの講義が最初であり⁵⁾、この点で本書は『ハイデガー』講義をかなり重視した読解を試みていると言えるだろう。

二つ目の違いは、先行研究ではデリダの歴史論を論じるうえで広義の現象学との兼ね合いに議論が限定されていたのに対し、本書が現象学以外の言説も踏まえながら彼の歴史論の形成を追跡している点にある。従来の研究では、後期フッサールにおける「歴史」概念やハイデガーの「存在の歴史 Seinsgeschichte」、レヴィナスの『全体性と無限』との関係から、デリダがどう「歴史」を思考したのかに議論が集中する傾向にあった⁶⁾。もちろん、デリダとフッサール・ハイデガー・レヴィナスとの関係は、本書のなかでも大きな位置を占めてはいる。しかし本書は、現象学の言説だけでなく、それ以外の言説にも十分な注意を向けようとしている。たとえば、『序説』のなか

ではじめて登場したとされる「歴史の思考」が、1963年のルーセ論「力と意味作用」や、同年のフーコー論「コギトと狂気の歴史」にどのようなつながっていくのかを考察した第1章や、『ハイデガー』講義や1966年の発表「人間科学の言説における構造、記号、遊び」、さらには1967年のバタイユ論「限定経済から一般経済へ」といったテキストを参照しながらデリダにおける「言語」の問題系をたどった第2章、そしてフッサールとベンヤミンとの関連からデリダの翻訳論を考察した補論などは、そうした試みの代表例であると言えるだろう。

このように本書は、「歴史」という視点からデリダの思想展開を考察するというある意味ではオーソドックスなテーマを扱っているが、取り上げるテキストからしても扱う論点の並びからしても、既存の研究とは一線を画するものとなっている。では、こうしたパースペクティブから描かれるデリダの「歴史の思考」とは、どのようなものなのか。次に内容の確認に入ろう。

2. 本書の内容と意義

序論のなかで著者は、デリダにおける「歴史の思考」のアウトラインを「エピステーメー」と「アイノス」という二つのギリシャ語に沿って描いている。もちろん、これら二つは著者が恣意的に選んだものではなく、『ハイデガー』講義のなかでデリダが「歴史」という語の語源に言及した箇所に基づいて採用された言葉である。デリダによれば、「histoire」というフランス語の語源は、一方で、ラテン語の「historia」を経て、「知識を得ること」を意味するギリシャ語の「ιστορεῖν」にまで遡る。しかし、他方でこの語は「学問的な知識」を意味する「ἐπιστήμη」に由来する言葉でもあり、この点で、「histoire」という語はその成立からして学問的な真理の探求と切り離せない関係にあるという(H, 155f.)。このような議論を踏まえて、著者は、「歴史」が普遍的な真理の現前というテロスへと向かう運動（それを著者は「エピス

テーマとしての歴史」と呼ぶ)を意味し、デリダの「歴史の思考」が試みたのは、こうした歴史の規定とは別の仕方、「歴史」を思考することにあつたと主張する⁷⁾。

それでは「エピステーメーとしての歴史」ではない「歴史」とはどのようなものなのか。それを明らかにするために、著者は『グラマトロジーについて』におけるエクリチュール論を参照している。本書によれば、一方で、エクリチュールは、文字に書かれることで学問的な知の対象が歴史的に伝承されていくことを可能にする知の歴史性の条件である。だが、他方で、文字には書き手の意図とは異なる意味で読まれうる可能性がたねにあるため、エクリチュールは知の歴史的伝達を可能にすると同時に書き手の意図を隠蔽するものでもある。こうして著者は、デリダが「エクリチュール」という語で思考しようとしたものが、語り手や書き手の意図を伝えると同時にそれを隠すという「言語」の二重の特性であると考え。そして、そのような言語によって語られる「歴史」を、著者は「アイノスとしての歴史」と呼ぶ。本書によれば、「αἶνος」というギリシャ語は一方で「語ること」を意味するが、それはまた« énigme » (謎)の語源である« αἶνιγμα »と強い親和性をもっている。よって、「アイノス」は、「語ること」を指す一方で、語り手の意図を隠し、謎を残し続けるという二つの意味を担う⁸⁾。そのため、「アイノスとしての歴史」とは「文字の伝承によって書き手の言わんとすることを隠蔽し放浪するような歴史のあり方」⁹⁾である。そしてこの「アイノス」は、言語によって歴史をひとつの流れとして組織すると同時に、そこに亀裂や裂け目をもたらしもするがゆえに、「エピステーメーとしての歴史」を可能にすると同時にそれを不可能にもする、そう著者は主張する。

こうして著者は、デリダの思想展開を動機づけたものが「アイノスとしての歴史」を思考することにあつたという仮説をたて、それを様々なテキストから跡づけている。その内容は、大きく分けて3つのパートに区分できる。

一つ目のパートは、「歴史と言語」という視点からデリダの思想形成をク

ロノロジックに考察した第1章と第2章である。そこで著者は、『序説』から、『ハイデガー』講義や『グラマトロジーについて』にいたるデリダの「歴史の思考」の変遷を追っている。それによれば、デリダの「〈歴史の思考〉の端緒的な出現」¹⁰⁾は、なによりもまず、『序説』におけるフッサール解釈のなかに見られるという。『幾何学の起源』のなかでフッサールは幾何学の歴史を、原-幾何学者において構成されたイデア的対象が、間主観的共同体や言語をとおして各時代の幾何学者たちへと伝承され、いつの時代でも万人に妥当する真理となるプロセスであると考えた。著者によれば、デリダは言語の特性に着目することで、こうしたイデア的対象の伝承を阻害する契機を思考しようとしていたという。一方で、イデア的対象は言語によってはじめて客観的真理たりうるという点で、言語はイデア的対象の客観性の条件であり、その伝承の可能性を開くものである。しかし、他方で、言語はそれを受け取る主体に応じてつねに別の意味で理解されてしまうという可能性をもつ。フッサールの歴史哲学は言語的表現の一義性に定位して起源への回帰を図る目的論に支えられているが、そこにデリダが見るのは、言語が別様の意味で理解される可能性をもつがゆえに、起源もまた一義的に伝承されないかもしれないという危険である。本書によれば、このような「歴史と言語」の問題は、後のテキストにも姿を変えて登場している。たとえば、1963年の「力と意味作用」は、元々あった意味の単なる転写ではなく、「書くこと」によってはじめて意味が意味として生じるような「エクリチュール」の創始性を問題にしているという点で、イデア的対象の可能性としての言語を論じた『序説』と地続きの関係にある。他方で、この論文のなかで彼は、形式や意味に還元できない「力」を「言語の他者」として思考しており、そのために「歴史的に受け継がれた形而上学的な言語を揺さぶり、それを他性へと開く」¹¹⁾ことの必要性を説いてもいる。こうして「歴史と言語」の問題は、「〈伝統的な概念性を解体するために、当の概念性に身を置かなければならない〉という必然性についての問い」¹²⁾へと移行し、この問いを思考した先駆者と

して、デリダはハイデガー・レヴィナス・バタイユを参照するようになる¹³⁾のだとされる。

二つ目のパートは、「隠蔽」もしくは「現前しないもの」の問題を中心として、デリダとフッサール・ハイデガー・レヴィナスの関係を考察した第3章・第4章である。著者によれば、『発生の問題』や『序説』のなかでデリダは、フッサールの「カント的な意味での理念」を独自に解釈するなかで、「無際限 indéfini」の問題を思考していたという。『イデーニ1』のなかでフッサールは、体験流をなす個々の時間様相の全体を理念的な仕方で見ることができると語っている。だが、デリダによれば、そこで直観されるのは体験流の全体を充實的に直観できないという本質的な未到達性である。つまり、理念的直観は充實不可能なものに対する直観でもあり、そこには「つねに非現前的なものが含まれることになる」¹⁴⁾。こうしてデリダは、「カント的な意味での理念」のなかに体験流全体の充實的な現前の無際限な未到達性を見てとり、そこで問われる「無限性」が肯定的無限ではなく否定的無限であると考える。しかし『声と現象』では、このような理念の無際限性が批判的に考察されるようになる。たしかに「カント的な意味での理念」が無際限性を示すことは間違いないが、それが未到達性として思考されるかぎり、結果として肯定的無限を想定することになってしまう。このようなフッサールにおける隠れた肯定的無限の想定こそが、デリダを「現前の形而上学」の批判に向かわせる、そう著者は主張する。ところで著者の考えでは、デリダはこのような現前批判を展開しながら、「現前しないもの」を独自に思考しようとしている。その一例が「痕跡」をめぐる考察である。彼にとって「痕跡」は、他のものを指し示し続ける運動を第一義とし、そこでは「他の痕跡を指し示すという意味で決して現前しない〈他なるもの〉」¹⁵⁾が問題になる。このような「痕跡の思考」を練り上げる過程で彼は、ハイデガーにおける自己触発、アレーティア、固有化の出来事 (Ereignis) の問題、さらにはレヴィナスの痕跡論を積極的に参照しながら、「現象と隠蔽」や「現前と非現前」の

問題を捉え返していく。そして、それは最終的に、「固有化されるがままにならない〈他なるもの〉の到来という出来事」¹⁶⁾を思考するようデリダを導いていく。

三つ目のパートは、これまでの議論を踏まえてデリダの語る「差延」や「出来事」の問題を「歴史の思考」として捉え直した第5章である。本書によれば、デリダが「差延」という語で名指そうとしたのは、一方で現前の取り戻しを目指す円環的な運動と、他方ではそのような円環に亀裂や断絶をもたらす「他なるもの」の侵入という二重の運動である。根源的な現前性へと向かうために大きく円環を描いて回帰する運動のなかで、その円環のなかには属さない「他なるもの」が突然侵入し、回帰の運動に裂け目を生じさせる。後期のデリダが「出来事」という語で思考しようとしたのも、こうした「他なるものの到来」を指す。もちろん、「他なるものの到来」によって亀裂が生じると同時にその亀裂を塞ごうとする運動も生じるが、また別の「他なるもの」が到来するがゆえに、こうして回帰の運動はその方向性を絶えずずらし、楕円状に回転していくことになる。本書によれば、このような楕円の運動こそデリダが「歴史」という語で思考しようとしたものであり、著者はこの「歴史」が円環的な回帰運動である「エピステーメー」とそれに亀裂を入れる他なるものの到来としての「アイノス」の二つの契機からなることを強調する。

内容の要約としては十分なものではないが、以上のように本書は、「エピステーメー」と「アイノス」という二つの語を軸に、デリダの思想展開を貫く「歴史」のモチーフを浮かびあがらせようとしている。こうした著者の視点は本書全体にわたって一貫しているし、その考察が、『序説』や「暴力と形而上学」の原稿版・雑誌版と書籍版の異動を精査するという地道な作業に支えられていることは評価に値する。そのような堅実な文献学的態度に加え、これまで見落とされてきた問題を、いくつも指摘している点も、本書の大きな成果である。たとえば、『言葉への途上』でハイデガーが語った Zeigen

(示すこと)の問題が、『声と現象』におけるデリダのフッサール解釈の背景をなしているという指摘(第4章)や、一般に目的論と混同されることの多かった「終末論」が「他者との関係としての終末論」という積極的な意味をもつという指摘(第5章)は、従来の研究にはなかった極めて重要な視点であり、これも本書の意義を証立てるものとなっていると言えるだろう。

3. 問題点と疑問

次に問題点の指摘に移ろう。評者は、デリダの思想展開が「歴史」の問題に貫かれているという本書の解釈には基本的に賛成している。しかし、はっきり言えば、本書ではこの問題を考察するうえで不可欠となる論点が明示的に考察されておらず、またデリダの引用に対するパラフレーズが不十分であるために記述が曖昧になっている箇所が多々あり、結果として消化不良に終わっている感は否めない。そこで本節では、そうした箇所を挙げながら、本書に4点ほど疑義を提起することにしよう。

(1) まず、素朴な疑問から入ろう。本書はデリダの「歴史の思考」の直接的な端緒を1962年の『序説』に求めているが、なぜ『発生の問題』ではなく『序説』なのだろうか。たしかに、『序説』では「歴史」の主題が大きく取り上げられてはいるが、この主題自体は1953-1954年に執筆された『発生の問題』のなかにすでに姿を現している。そして、この著作のなかでデリダは単に後期フッサールが語るような「歴史の目的論」とは別の文脈で、独自に「歴史」を思考しようとしていた節がある。たとえば、『発生の問題』には後年の「差延」概念の母型にもなった「根源的弁証法(dialectique originaire)」という語が登場するが、この語もこの時期のデリダが独自に「歴史」を思考しようとした形跡のひとつである。「弁証法」とは、相対立するものを統一するようなヘーゲル的な弁証法ではなく、起源の起源性がその所産との連続性のなかでしか規定されえないという逆説を示す。たとえば、事

柄 A が事柄 B を生じさせた場合、A は B の原因だが、B に対する A の先行性は B が生じたということがあってはじめて成り立つといったような場合が、これに該当する。『発生の問題』のなかでデリダは、起源の起源性を成立させるこのような所産との連続性を「歴史」や「伝統」と呼んでおり、ここから彼はどんな純粋な起源も歴史的であり、所産との連続性のなかではじめて規定されることを強調する¹⁷⁾。しかし、本書では、『発生の問題』に関する考察は主に「カント的な意味での理念」の問題に限定されており、「根源的弁証法」と「歴史」の関係に関する考察はなされていない。もちろん、『発生の問題』では「歴史」の主題が、『序説』に比べて、それほど前景化されていないのはたしかである。しかし、それが『序説』や後年の思想展開の背景になっているのもまた事実だろう。よって、デリダの思想形成を「クロノロジックな視点」から検証するのであれば、『発生の問題』における「弁証法」と「歴史」に関する考察はやはり必要だったのではないだろうか。これが最初の疑問である。

(2) 第二の疑問は、『ハイデガー』講義における「生起 (geschehen)」の問題にかかわる。本書の冒頭で著者は、『ハイデガー』講義のなかでデリダがドイツ語の « Geschichte » (歴史) に言及した箇所をもとに、彼における「生起」の位置づけを考察している。そのなかで著者は、ドイツ語の « Geshichte » が「元々は […] 偶然生じたものの集まり [rassemblement de ce qui échoit] を指す」(H, 156) という『ハイデガー』講義の一節を引用し、それを「生起する出来事の歴史」と言い換えたとうえで、「アイノスとしての歴史」に重ねあわせている¹⁸⁾。本書の後半で「アイノス」が歴史の流れに中断をもたらす「他なるもの」もしくは「出来事」として考察されていること(第5章)を踏まえるなら、おそらく著者は『ハイデガー』講義のこの箇所のなかに後期デリダにおける「出来事」概念の萌芽を暗に読み取ろうとしているように思われる。もちろんそうした解釈は可能だし、一考に値するものではある。しかし、仮にそうだととしても、著者が引用した『ハイデガー』講

義の先の一節はその根拠にはなりえない。なぜならこの一節は、『存在と時間』のなかでハイデガーが語った「現存在の生起」、つまり現存在の時間性の動性 (Bewegtheit) の特徴を考察するため、デリダが当時の受講生にドイツ語の « Geschichte » (および « geschehen ») のニュアンスを説明している箇所だからである。こうした文脈を踏まえるなら、この一節のなかにデリダ自身の歴史観が凝縮されていると考えるのは、解釈として不正確であると言わざるをえない。

とはいえ、著者も引用しているように¹⁹⁾、たしかに『グラマトロジーについて』のなかでデリダは「エクリチュール」の問題をドイツ語の « Geschichte » に結びつけているし²⁰⁾、この点で、« Geschichte » の問題がデリダ自身の「歴史の思考」に関わってくるという著者の着眼点は面白い。だがそれを検討しようとするのであれば、ハイデガーの「生起」概念とデリダのそれとを対比的に検討する作業が必要なのではないか。事実、『ハイデガー』講義のなかで彼はハイデガーにおける「生起」の問題系(たとえば、生起 (geschehen) - 歴史 (Geschichte) - 歴運 (Geschick) の結びつきなど)を、『存在と時間』や中後期のテキストを参照しながら詳細に辿っており、「生起」を « historial » と訳したコルバン²¹⁾やそれを « accomplissement » と訳したベームとド・ヴァーレンスに対して、デリダは « historier » という独自の訳語を提案している (cf. H, 150f.)。この点について本書では特に言及されていないが、仮にデリダがドイツ語の « Geschichte » をとおして「歴史の思考」を独自に構想しようとしていたと考えるなら、『ハイデガー』講義における「生起」の問題は、本書にとってもその内容に深く関わる重要な主題となるはずである。とすれば、当時のフランスにおけるハイデガー受容の動向を踏まえつつ、デリダがハイデガーの「生起」をどのように理解し、それをどのように乗り越えようとしたのかが問われるべきではないだろうか。これが第2の疑問、というより提案である。

(3) さらに、本書で語られる「アイノスとしての歴史」の規定についても

疑問が残る。すでに見たように、本書において「アイノスとしての歴史」は「語ること」と「謎」の二つの側面をもち、言語によって歴史をひとつの流れとして形づくるとともに、断絶をもたらす「他なるものの到来」の二重運動として描かれる。だからこそ、「アイノスとしての歴史」は、「〈エピステーメーとしての歴史〉を開き、条件づけるものであるとともに、その歴史を不可能にするもの」²²⁾であるわけである。ところが、議論が進むにつれて「アイノスとしての歴史」は別の意味で用いられるようになる。たとえば、第5章では、現前に向かう円環の運動と円環に裂け目を生じさせる「他なるもの」という「差延」の二重性を指摘したあとで、著者は本書をこう締めくくっている。「〔…〕〈歴史の思考〉とは、〈エピステーメーとしての歴史〉のなかに刻み込まれた〈アイノスとしての歴史性〉の「裂け目」を思考することであって、その思考は「楕円」として形象化するものである」²³⁾。だとすれば、図式としては「アイノス」は、「他なるものの到来」に対応することになるが、これは先ほど見たような「アイノス」の規定と両立しない。というのも、一方で著者は再帰の運動と出来事の到来の双方をまとめて「アイノス」と呼んでいるのに対して、他方で後者の方だけを「アイノス」と呼んでいるからだ。要するに、定義が曖昧なのである。結局のところ、「アイノスとしての歴史」は、円環と到来からなる歴史のプロセスそのものを指すのか、それとも単に他者の到来だけを指すのか。これが第3の疑問である。

(4) これと関連して、最後にもう一点。本書では、デリダの語る「出来事」は一貫して歴史の流れに中断をもたらす「他なるもの」として描かれる。では、「出来事」そのものは歴史的なのだろうか、それとも歴史的ではないのだろうか。著者によれば、デリダにとって「出来事」は、先取り不可能な仕方でも垂直的に到来し、あらゆる期待や予測のまったく外部にあるようななかである。そしてそれを著者は、「歴史の通常の流れ」を中断し、それによって歴史をなす出来事」²⁴⁾と言い換える。では、デリダの言う「出来事」は歴史に亀裂や裂け目をもたらすものではあっても、それ自体は歴史に属さ

ないものなのだろうか。たしかに、晩年のデリダは「出来事」が予見不可能で垂直的に落下する特異な「他者」であることをいたるところで強調している。しかし他方で彼は、「出来事」が単に歴史や知の外部から降りかかるなにかではなく、歴史的な相続や反復のなかでしか生じえないことを強調した哲学者でもある²⁵⁾。たとえば、何度も読まれてきたテキストの同じ箇所を繰り返して読むなかで、それまでの理解がまったく変異していくような経験もまた、ひとつの「出来事」である。そこで想定されている「出来事」は、同じことを繰り返すなかで生じるこれまでとは別のなにかでもある。こうした「出来事」のモチーフは、使い古された概念を繰り返し用いることでその概念に根本的な変異をもたらす「古名 (paléonymie)」の問題、そして後期思想で語られる「相続」の問題にも登場するものである。このことを踏まえるなら、「出来事」は既存のシステムの外部から到来してそれに変容をもたらすというより、既存のシステムの内部で生じ、そのシステムに変容をもたらすものではないのか。だとすれば、「出来事」の到来それ自体もまた、歴史を必要とするのだと言わなければならないのではないだろうか。これが最後の疑問である。

以上、本書が抱える問題点や疑問点を列挙してきた。もちろん、これらの点は本書の価値をいささかも減じはしない。なぜなら研究書の価値とは、扱う主題の新しさや解釈の一貫性によってのみ測られるべきではなく、それらが惹起させる「問い」の深度からも測られるべきものでもあるからである。

注

- 1) 亀井 2019, p. 5.
- 2) Cf. 亀井 2019, p. 18.
- 3) こうした研究は、『フッサール哲学における発生の問題』の刊行以後、1990年代から2000年代にかけて盛んに行われている。本書で言及されているもので言えば、次のものがある。—— cf. Marrati 1998 ; Lawlor 2002 ; Kates 2005 ; Baring 2011. とりわけ Kates 2005 は「歴史」の主題を軸に初期フッサール論から1967年以降の著作に至るデリダの思想形成を論じており、おそらく本書に多大なインスピレーションを与えた

研究であるように思われる。

- 4) 亀井 2019, p. 251.
- 5) Cf. 亀井 2019, p. 66.
- 6) たとえば、Kates 2005 はデリダの思想形成を論じるうえで、フッサール・ハイデガー・レヴィナスとの関係に多くの頁を割いている。また Dastur 2016 もデリダにおける「歴史」の問題を論じているが、これもフッサールとハイデガーにおける「時間」と「歴史」の問題を糸口としてデリダ的な「歴史」概念の射程を検討するという内容である (cf. Dastur 2016, p. 85-106)。レヴィナスとの関連からデリダの「歴史」概念に言及したのものとしては Lamy-Rested 2015 があるが、これも、「暴力と形而上学」のなかでデリダがどう「歴史」を思考しようとしたのかを検討したものである。
- 7) Cf. 亀井 2019, p. 6ff.
- 8) 補足しておく、「アイノス」という語は、恣意的な選択によって採用された言葉ではなく、『ハイデガー』講義のなかでデリダが énigme (謎) のひとつの語源としてギリシャ語の αἴτιον を挙げている箇所を踏まえたものである (cf. H, 257 ; 亀井 2019, p. 13n6)。
- 9) 亀井 2019, p. 12.
- 10) 亀井 2019, p. 35f.
- 11) 亀井 2019, p. 42.
- 12) 亀井 2019, p. 84.
- 13) フッサールとベンヤミンとの関連からデリダの翻訳論を考察した補論も、「同じ語はつねに別の語であるという多義性」(亀井 2019, p. 233) と「言語の相続による歴史のなかで、その外を夢見るチャンス」(亀井 2019, p. 244) が問題になるという点で、このパートに属するものである。
- 14) 亀井 2019, p. 109.
- 15) 亀井 2019, p. 172.
- 16) 亀井 2019, p. 180.
- 17) 一例として、フッサールの『内的時間意識の現象学』講義における「原印象」との関連から、デリダが「歴史」と「伝統」について語っている箇所を引用しておこう。「それゆえ、起源的で構成的な現在は、ある「非-現在」との連続性のなかでしか絶対的ではない。[...] 内在的体験の時間性が時間現出の絶対的起点であることは必然的だが、この時間性が絶対的起点として現れるのはまさしく「把持」のおかげなのである。それは伝統のなかでしか始まらないし、歴史的遺産 [héritage historique] をもつからこそ創造するのである」(PG, 123)。
- 18) Cf. 亀井 2019, p. 10f.
- 19) Cf. 亀井 2019, p. 11.
- 20) 「エクリチュールは、あるひとつの歴史——つまり歴史科学——の対象である以前に、

歴史の領野——つまり歴史的な生成の領野——を開く。そして前者（ドイツ語で言えば *Historie*）は後者（*Geschichte*）を前提している」（DG, 43）。

- 21) Cf. Corbin 1968, p. 18. 「Geschehen は生成とも違うし、自然の進展やエラン・ヴィタルでもない。それが示しているのは、[...] 世界の歴史性を可能にする現存在に絶対的に固有な構造である。この関係を際立たせるためには、historial という古いフランス語に訴える必要がある」。
- 22) 亀井 2019, p. 13.
- 23) 亀井 2019, p. 225.
- 24) 亀井 2019, p. 202.
- 25) 「特異なものはつねに反復をとおして始まり、予測不可能な仕方では到来者として到来する」（PM, 367）。

略号

デリダの著作からの引用は、以下の略号とともに頁数を本文中に記す。

DG : *De la grammatologie*, Paris, Minuit, 1967.

PG : *Le problème de la genèse dans la philosophie de Husserl* (1953-1954), Paris, PUF, 1990.

PM : *Papier Machine*, Paris, Galilée, 2001.

H : *Heidegger : la question de l'Être et l'Histoire. Cours de l'ENS-Ulm 1964-1965*, Paris, Galilée, 2013.

参考文献

Baring, Edward (2011): *The Young Derrida and French Philosophy, 1945-1968*, Cambridge University Press, 2011.

Corbin, Henry (1968): « Avant-propos de H. Corbin » [1938] , *Question I et II* de Martin Heidegger, Paris, Gallimard, 1968, p. 13-20.

Dastur, Françoise (2016): *Déconstruction et phénoménologie*, Paris, Hermann, 2016.

Kates, Joshua (2005): *Essential History*, Northwestern University Press, 2005.

Lamy-Rested, Élise (2015): « L'histoire d'un hiatus, le hiatus comme histoire », *Levinas-Derrida : lire ensemble*, dir. D. C.- Levinas et M. Crépon, Paris, Hermann, 2015, p. 133-145.

Lawlor, Leonard (2002): *Derrida and Husserl*, Indiana University Press, 2002.

Marrati, Paola (1998): *La genèse et la trace*, Kluwer Academic Publishers, 1998.

亀井大輔 (2019) : 『デリダ 歴史の思考』、法政大学出版局、2019年。

